天狗にさらはれた御馳走の鶏鍋

騎六ノ一
騎兵伍長　石走善吉

連日の強行軍に中隊の馬は次々に行軍不可能になり　隊列からはなれて徒歩者と同行小隊の戰斗力は次第に衰へて行きます　小隊二十八頭の中　乘馬に堪へ得るのは　隊長殿以下四騎何人と少ない一ケ少隊でした

南京總攻撃二日前　我第一小隊は將校斥候として　某方面の敵情　地形捜索の命を受けタ刻出発しました　後に殘るのは私一人です

「小隊長殿　今夜帰られますか」

と　聞けば

「帰るよ　飯をうんと炊いて　此の鶏で御馳走を作っておけ」

と　八羽の鶏を差し出して行かれました

私は一人で馬繋し　馬の手入を終へて　眞白い米飯を炊き　鶏を料理して鶏鍋をこしらへました

十二時過ぎまで待てど斥候は帰って来ません　道路上に幾度も出て見ましたが帰りません　心配になって指揮班に行って聞いて見ると

「心配は要らない」　と言ひます

炊事場に藁を持ち帰へり　其の上に座って待ってゐる中に疲れの為いつしか眠ってしまい　目を覚まして見るとあれから三時間位経ってゐます　附近一帶には歩兵約一ケ大隊許り到着して　小さな町は兵隊で一杯です

斥候はまだ帰りません　私は腹が空いて

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

仕方がないので 二人で飯を食べ様と思って 釜の蓋を取って見るとこれは如何に 一杯溢れてゐた米の飯も 美味しそうだった鶏鍋も一切も有りません 只釜の底に黒焦が少し残ってゐました

私は唯ぼんやりと釜の蓋を握ったまゝ狐につまゝれた様に 立ちすくんで仕舞いました

涙の出る程癪に障りますが 何うにも仕方はありません 其れより腹ペコ〳〵で帰って来るであらう小隊長殿一行の事を思ふと 斯うしては居られません 其處らの物を荒々しく蹴散しながら私は一生懸命 第二次の御馳走に取りかゝりました

従軍三年癪に障ったこの想出でも 心こめた私のあの御馳走を今年の食いをさめに 南京城頭華と散った戰友もあらうと 今では懐かしい様な 有難い様な そして嬉しい想出の一つとなりました

月下の斥候

騎六ノ二
騎兵上等兵 菊永政治

十二月九日二〇〇〇 彼我の銃砲声は殷々と響き渡り 私達の宿営地附近には敵砲弾が落下炸裂します 私は馬繋場で馬の手入れの手を止めて 皎々と照り映へる月を眺めてゐました

此の時命令受領より帰った 鶴留軍曹が 「我小隊から斥候だ 希望者は出ろ」 と云ふので私も希望しました 明日聯隊が渡河せんとする橋梁偵察の任務を以て

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

長以下四名　夕食もそこ〳〵に白く光る路上に黒い影を落して進みました。

クリークを渡り　山腹の斜面を辿つて再び路上に出ると　敗敵を追つて急進中の大部隊が道路一杯に溢れてゐます　此の部隊の間を縫つて第一の橋を渡れば　歩兵の將校斥候に會ひました　任務は私達と同様橋梁偵察で此處から一將程先まで行つたけれど　敵の有力部隊にぶつかり進めなかつた　と云ふことです　私達は決死任務を遂行せんと　此處で小休止をして一服やりました　班長は決意に満ちた声で

「皆しっかりやるんだぞ」　と云ふ

見合す皆の顔は緊張に引緊つてゐます

やがて静かに前進を開始しました　三百も進んだ頃　人の唸る声が聞えます　友軍の負傷者かと足を止めて

「誰か〳〵」

と呼んで見ましたが返事なく　其の声は直ぐ消えてしまいました

敵弾はもう身近に飛んで來る　姿勢を高くしては進めない　匍匐前進で行くこと二百　敵弾は益々飛んで來る　任務を終へて五六米手前の一軒屋に近づくと　突然ケエツコ機銃の狙撃を受けました

「やられたッ」

と叫ぶ声がする　迫口です　左腕貫通です　警戒を嚴にして應急手当を済ましし　帰途につきました

帰路野戰病院に越口を收容して中隊に帰り　中隊長殿に報告すると

「御苦労だつた」

と　有難い言葉をいただきました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

深々感じた御戦友愛

騎六八二
騎兵軍曹　濱田忠男

「おい　危いぢやないか」
斥候長鶴留軍曹の声が押へる様に聞えました　斥候員は瞬間躊躇した様に停止しました

「斥候長殿　前方の堤防上に何か人声が聞えます」
低い声で報告しました
南京西方八粁の地点　敵の右翼第一線と思はれる地点です　自分達斥候長以下四名は明日の聯隊奪戦路を求めるため　小米行方面の道路偵察の任務でした
十二月の夜空には寒月が皎々と冴え渡り雲一つない夜でした　しっかりとかぶった鉄帽の下から見合す眼は異様に輝き　固い決意が漲ち溢れてゐます
漸くしで我にかへって見ると　斥候長以下葦の中にピッタリ伏せてゐました　斥候長は前進の記号をした
「浜田前進だて」
越口上等兵殿が声を掛けてくれました　月は私達の任務を防害する様に地上を明るく照らしてゐます
「班長殿　行ける所まで行きませう」
「うん行かう　今何時だ」
「二の三。　です」
「そうか　ぢや行かう　俺が先頭に行くからお前達は後より来い」
葦原を出て堤防に沿って一軒二軒と点綴

0623

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

する家屋の陰影を利用して　鼠の様にタヨロ〳〵と躍進しました

「おい　此処迄しか家はないぞ　困ったな　然し行かう」

と　立ち上った私達の背を老樹の間から漏る月光が明るく照らします

敵の第一線を攻撃するのでせう　依然として激しい銃声が聞えてゐます　勇み立つ気持を押へ分隊長の動作にならはんとした時猛烈なケエツコ機銃の集中射を受けました

連續発射する敵弾は身辺に落下します

分隊長の

「後へ」　の号令と同時に

「やられたッ」

と云ふ声がする　駆け寄つて見ると越口上等兵殿です

「上等兵殿　やられましたか　しつかりして下さい」

上等兵は左腕を抑つて家陰に這入りました　見ると夜目にもハツキリと血が軍衣を透つてゐます　私は取出したハンカチで應急の止血をしました

荒川上等兵が

「浜田済んだか　敵は不だ接近して来る様だぞ」と云ふます

「済みました」

分隊長は

「さあ帰へるぞ　一人づゝ退れ」

と指示される　私は越口上等兵を背負つて立上りました　月はあく迄冴へ　無性に私の感情をそゝります　戰友の歌の一節が脳裡を掠めました

此処は御国の何百里
はなれて遠き滿洲の
赤い夕日に照らされて
戰友は野末の石の下

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

約二〇〇米位退つてから敵弾をさけて再度繃帯をしました

「越口上等兵殿　もう安心ですよ」

と云ふと

「浜田　荒川済まん　何の勲を立てずに入院か　残念だよ　これ位の傷では恥しい」

如何にも口惜しさうに言ひます

「馬鹿な事を云ふな　任務は完全に果したんだ」

と　荒川上等兵が叱りつける様に慰めます

「お前達に迷惑かけて済まない　後の事はよろしく頼む

浜田　俺の右の物入れに何か入つてゐる俺は今から入院するのだからお前に贈る受取つてくれ

浜田　お前は今から俺の分まで働いてくれ」

「ハイ　有難う　吃度働きます」

受取つたのは　彼が常に身につけて離さなかつたお守と寫眞でした

「上等兵殿有難う　此を身につけて吃度二人分働きます　決して人に負ける様な事は致しません　浜田は明日の戰斗には戰死を覚悟してゐます」

と　誓ひました　平常いたはつてくれ良く指導してくれた戰友が此れ程まで自分の事を思つてくれたのだ

私は感激にふるへる手で　物入にそれをしまふと　上等兵殿を又背にじました　見上げる空に浮べてゐる月が涙でくもつてぼんやりとしてゐました

戦衣を通してつたはる　彼の戰友愛を背に感じ乍ら　野戰病院に送り届け中隊に復帰しました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

「誰か」と立派な日本語

騎六ノ四
騎兵曹長　古城道恵

南京城攻撃の事です

敵の主退路下関附近の敵情捜索を命ぜられた上崎將校斥候員として　〇三〇〇頃宿営地を出発しました

とても眞暗で一寸先も見えぬ位です　南京城は我軍に全く包囲せられて　敵味方の銃砲声で殷々とし城内各所に火災を起し　黒煙が物凄く立上り　焔は眞赤に天を焦し恰も地獄繪の様でした

斥候長以下肅々と前進中〇四〇〇頃突然二、三〇米の暗闇から

「誰か」

二声三声　日本語の誰何を受けました

とても気合の這入った元気な声です

斥候長殿が

「友軍だ　騎兵だ　お前達は二十三か」

其の声が終るか終らぬ内に　猛烈なケエツコ及小銃の一斉射撃です

「しまった　全滅か」

一瞬全身の血が頭に逆上した様な感じがしました　道は一本道左はクリークで如何ともも出来ません

どうせ死ぬなら敵陣へと軍刀を引抜いた其瞬間　猛烈な弾雨の中で凛然たる斥候長殿の声が耳に響きました

「各個半輪班歩　部落迄退却」

一〇〇米位後方の部落に馬を入れた時は無我夢中でした

後から弾丸の来る程気持の悪いものはあり

0626

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ません　全滅を覚悟したのに唯一人の負傷者も出なかつたのには思はず神仏の御加護と一べの中で手を合せました

それから徒歩で敵陣を偵察しました　間もなく四十五の主力が來て激烈な戰斗が展開されて　丈を粉碎しました

夜が明けてから見たのですが　あんなに近くから射たれて斥候員に一発も中らなかつたのが不思議でなりません

「闇夜に鉄砲」の言葉を痛切に感じました

曉の殲滅戰

騎大尉　騎兵准尉　福山德次

南京城陥落も今日か明日かと目睫の間に迫りました

我が騎兵聯隊は兵科の特性上　敵背後に迫り其の退路を遮断する如く命ぜられ　將兵一同は此の晴の一戰に參加する光榮に　戰慄を失してはならぬ　他に後れてはならぬと　意気天を衝く有様で　九州男子の面目を遺憾なく発揮し頼もしい限りです

やがて南京近く河畔に近ずく頃　江上を遡江する敵船を認めました　此の附近一帯には河線に沿い　可度誘向きの敵散兵壕が構築されてゐます

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

重軽機の配備は全く完了しました　敵船は
友軍と思つてか　それと　知らずか此方に
向つてだん〳〵　接近して来る　息を殺して
待機してゐた我重軽機は一斉に火蓋を切り
ました
命中は気持の好い程確実です
船から應戰しますが　やがて敵彈も來なく
なり　夢遊病者の様に本流に翻弄され乍ら
姿を消してしまひました
小手調べに極軽い一戰でしたけれ共　幸先
に恵まれた様で皆の顔には微笑が浮んでゐ
ます
後の方で兵隊の歌声が聞へます　栗の籠を
引出して喜んでゐるのでした　恵角　果実
類に縁の遠い兵隊には珍らしく　其れを食
つては浩然の気を養ふのでした
餘つたやつを鞍嚢や雜嚢に結込んでゐる者
もあります

翌朝は早朝出発　愈々敵の本據目かけて前
進しましたが　間もなく重輕機の熾烈な集
中火を浴せられました　早速反対側の堤防
に馬匹を移し　徒歩戰下馬は闇の中に整へ
られました　○隊を中央○隊左　自分の隊
は其の右に陣地を占領しました
段々と夜は明けて行きます　敵は早速迫撃
砲彈を御見舞ひし始めましたが　友軍の志気
は益々旺盛です　河線に沿つて前進中　否
退却中の敵は無数です　彼我の距離は極め
て近いです
漸く彼我の識別が明らかにならうとする時
我隊は一斉に射撃を開始しました　群がる
敵の中には斃れる奴も居れば　勇敢にも地
物を利用して躍進し射撃をする奴もゐます
而し我猛火に敵しかね　何時しか四分五裂
となりましたが　其の中に彈雨を潜つて躍
進して攻撃を續ける者がありましたが

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

敵作ら天晴でした
愈〻戰機は熟し突喪の時機に至りましたが
側背ハより○隊の正面射の関係から○隊
に傳令が飛ぶました 幾度か大声で連絡し
ますが 向うは夢中で聞えないらしい
傍に行って肩を叩いて初めて連絡がとられ
我が隊が側背よりする突喪に續いて ○隊
の正面よりする突喪に成功した様な次第で
す、
本戰斗で津曲伍長が名誉の戰死を遂げまし
た 彼は突入の時 敵の胸部を突刺した瞬
間 其の敵の発砲に依り壯絶なる戰死を遂
げ 我が隊の敵殲滅に多大の戰功を樹てた
のであります
前夜おそく澤村軍曹の指揮で放牧場の牛舎
附近に分哨となってゐた時 牛舎にあった
牛皮の外套を着込み 子供の様に喜んで任
務についてゐた ありし日の面影が目に浮
んでなりません
續いて部隊は前進を重ね 敵の背後に進出
幾多の戰功を樹て 南京城陥落の一頁を
飾ったのであります

敵トーチカを占領

騎六ノ14
騎兵軍曹 新城一勝

愈〻南京城總攻喪は十二月七日より開始
されました 我騎兵部隊は捜索に又遮路遮
断に急進しまして 早くも十二月九日には
南京城を目し得る板橋鎮に達しました
私の部隊は三十六旅團長の指揮下に入りま
して 南京城西門方向より攻喪致しました
又退路遮断の任務をもちまして揚子江に沿
ひ前進しました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

十二月十三日〇ノ三〇棉花地に達しますと退却中の約三百の敵と還遇して未だ戰史にもない大戰ヒは開始されたのであります

當時機関銃は聯隊の左翼に陣地を占領しまして　私は陣地の小隊長殿と連絡の為　聯隊本部を出発しまして程なく参りますと

某一等兵は私を見ると青い顔をして入込みながら

「班長殿　右前のトーチカに敵兵が十名位入って居ります」　と云ふので

吃驚して未だ薄暗くて物も明瞭に見えないのです　良く透して見ますと確かに居る様で　ボソ〳〵と話をしてゐます

其の時恰度某上等兵が手榴弾を持って來ましたので　早速貰ひ受け成丈け近くに接近して投げつけますと　轟音と共に黒煙の中に人の倒れるのが見えました　其の中夜も明けはなれ　見分けもつく様になりました

ので　直ぐ様　駆寄って見ますと六七名呻いて血に染って倒れてゐました

其の時右方に丁一等兵が

「残念だ　やられたッ」　と云ふ声を聞きましたので

「よし　俺が仇は討ってやる」と

側に走り寄り　彼の騎銃を取り圍く倒れてゐる敵を次々ととゞめを刺す　其の気持（戰友の仇を見事取った）と思ふた時　嬉し涙が止りませんでした

敵が最後のトーチカも遂に占領し　嬉しさ胸一杯にて　任務達成のため　小隊長殿の位置に駆けつけました

敵追へば　江畔　冷たし　冬の風

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

菜庄附近
將校斥候の想出

騎六ノ一
騎兵中尉　村上正良

昭和十二年十二月十三日　我が軍の猛攻により南京城も完全に我軍の手に帰しました

其の日退路を失つて数千の大軍が正に蟻路黒影と云いませうか　楊子江の右岸に沿つて　雲霞の様に雪崩をうつて敗走して来ました　聯隊はこれを巧妙なる作戦により殲滅を期して交戦　其の意気軒昂　其の勢は決河の如く　遂に此を再び立つ能はざらしめました

自分以下三十名　上河鎮の一土民家屋で中食をとつてゐますと　聯隊令令が達せられました

時恰も一二〇〇

村上少尉ハ兵五騎ヲ率ヒ　上河鎮ー江東門ー菜庄道ヲ前進シ　該地附近ノ敵情　地形特ニ橋梁ノ有無ヲ偵察スベシ

自分は牧野信人　石走善吉　加藤文夫　工藤映雄　井上義春の五名を選抜し任務を示し　完全な準備を整へさして目的地に向ら馬を進めました

破壊された敵の各種掩体　石壁の上に滴つてゐる鮮血　累積してゐる敵の遺棄死体　切断された鉄條網　放棄せられた多数の矢　器被服　其の様は昨日迄の戰斗が如何に激しかつたかを　如実に物語つてゐます

江東附近で敵兵数名敗走するのを認めました　又出発地から北進すること四粁附近に於て　敵が二十名余り集結してゐるのを

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

加藤一等兵が視察して報告して参りました
ので　直に徒歩戰を決行しました
自分達は敵の猛射を浴び乍ら速に之に接近
し　一斉に射撃を開始しました　射彈は面
白い様に命中　敵がクリークの中に顛落す
る様は実に痛快です　寸時にして之を壊滅
する事が出來ました
勇気は益々ふるい立ち　再び馬上に疾風を
切って前進すること数百米　又こゝ四五十名
の敵に遭遇　再び徒歩戰を決行し数分にし
て之を西方に潰走せしめ　横はる敵屍の間
を縫ふて急進目的地に到達　直に附近を偵
察して傳令二騎を以て聯隊長に報告しました
自分は残余を以て附近を偵察し乍ら帰路に
つかうとした時　菜左東方部落に三十名余
の敵兵が居るのを発見しました
小銃彈はしきりに何處からか飛來し　迫撃
砲彈は附近に炸裂します
自分達は機先を制して該敵に向って猛烈果
敢なる乘馬襲撃を敢行しました　敵は周章
狼狽施す術も知らず　全く大混乱を呈しま
した
倒れて悲鳴をあげる者　鮮血に塗れて右往
左往する者　自分達は思ふ存分馬上に軍刀
振ひました
此の時勇敢な石走一等兵は平素より心得ある
支那語で　私の意志を譯し　先ず
「鬪志の有無」　を問へば
彼等曰く
「全く無し」　と
附近の敵を誘致すれば　其の一兵は
「中国兵　多々有」　と云ふ
石走一等兵は巧に支那語を操り　敵兵に全
く戰意を失はしめ　降伏させ　集合する様
に命じますと

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

部落から續々と出て約二百名集りました
其の武器はイエツコ機銃三　小銃一三〇
拳銃六　彈薬手榴彈等多數
彼等は頑に助命の請願します　其の有様
は実に憐で敗戰の悲惨さを痛感しました
斯く無事に任務を遂行し　多大なる成果を
挙げ得た事は御稜威の然らしむる事は勿論
ですが　一つは斥候員の勇猛且適切なる行
動に依るものと信じます
任務を果たし　聯隊長殿の下に斥候員一同
意気揚々と引上げた時は　既に暗く　北斗
七星は冰しくかがやいてゐました

☆　☆　☆　☆　☆　☆

綿花地の突喪

騎六ノ一
騎兵軍曹　山崎為雄

昭和十二年十二月十三日　聯隊は綿花地
附近に於て大迂廻して　敵の退路を遮断す
べく待機してゐました。
六時頃敵の大部隊は揚子江右岸を我陣地に
向つて退却して來ました　敵は未だ気付か
ない様です　押し合ふ様にして先を競つて
やつて來ます　既に三百米に近接しました
時　射撃命令は下り　重機輕機小銃は一斉
に火を吐きました　彼等は附近の地形地物
を利用して　死者狂になつて應戰します。
聯隊は早くも之を三方より包囲して　全く
袋の鼠としてしまひました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

斯うなっては　敵は前進も後退も出來ません　楊子江を泳ぎ渡るより外に方法は有りません　情況は益々我に有利です　私達は今はもう突喪を待つばかりです

壯なる中隊長殿の突喪号令は　朝の空気を震はして響き渡りました　待兼ねた私達は　その声の終らぬ中に一斉に飛び出しました　百米位は無我夢中

「突込めー」

の号令と共に　萬雷一時に裂く様な喊声と共に群がる敵中に突入　三名を刺す　腰を抜かして命乞ひする奴　懸命に逃げんとする奴　中には拳銃を向けて射つ奴もあります　大部分は楊子江に飛込み　五六百の敵を殲滅しました

生れて始めての尊い体験でした　痛快な殲滅戦でありました

上上の敵を猛射

騎六所
騎兵軍曹　俵伊三郎

十二月十日大勝関（南京城南方三キロ）附近を掃蕩を期し我部隊は行動しました　南京東面及北面より突入する我歩兵部隊に抗しきれず　南門に向ひ退却する敵の退路を遮断する任務を以て　我部隊は踊の音も軽く大勝関部落に向ひ前進しました　突如として敵の銃声　頭上を気味悪く唸って飛去ります　不意の事故皆一時は吃驚した様でした

誰言ふとなく部隊は道路の右凹地に這入り停止しました　飛來する弾を予想すると　相当の敵が居る

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

模様です

部隊は直に徒歩戦下馬で前進　約二百米余
来たと思はれる頃は既に僅か明るくなつて
ゐました

大勝関部落に到着しましたが　敵兵らしき
もの認めません　敵も静粛に行動してゐる
のでせう

突如右方向にて我右翼中隊が戦斗を開始し
た様です

我が機関銃小隊　新本軍曹を長とする　第
一分隊は　大勝関家屋の左端に陣地を占領
し　敵の動静を監視してゐました

其の時前方約二百米　楊子江沿岸に沿ふて
相当多数の退却する敵を発見しました

待ちに待つた機関銃　なんで此の敵見逃す
事が出来ませう　今迄の沈黙を破り　銃身
も焼けよとばかり射つて〈　射ちまくり
ました

敗退する敵の狼狽の様は実に笑止の様です
後に續いた残敵は逃げ場を失い　彼の高い
楊子江に飛び込み泳いで渡つてゐます
機関銃及軽機小銃は直に此を狙撃　江上に
弾着が明瞭に見えるので確実です
弾にあたつた敵は水面より姿を消し沈んが
行く　実に痛快　胸がスートする様な気持
です

三百余の敵を一人残らず楊子江水中に沈め
て仕舞いました

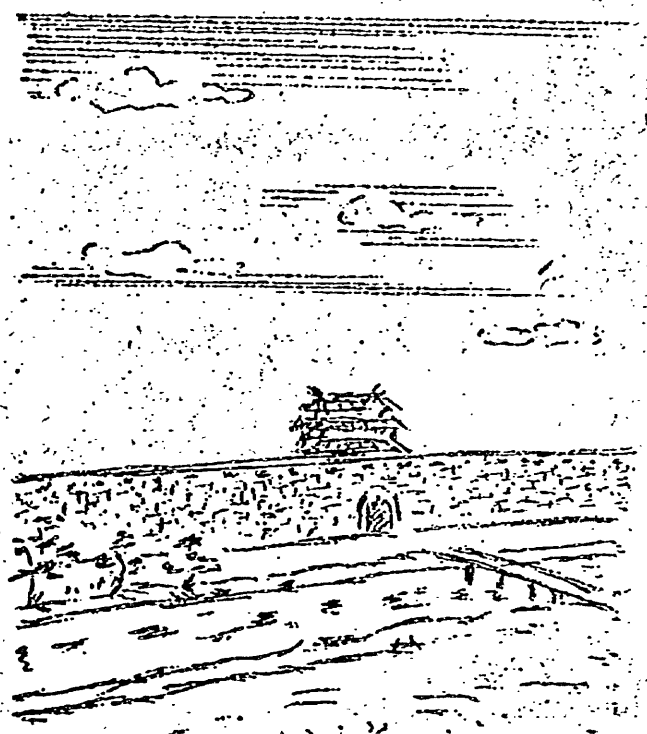
其の後　敵の大部隊右に迂廻す　との通報
で　我々第一分隊は迂廻する敵の退路を遮
断　殲滅する任務のため新陣地を占領待期
しましたが　敵兵は来ません

聯隊主力は突喪を敢行する模様です
我々機関銃も之に遅れじと前進しました
約五百米余前進し　小銃中隊の突喪前進を
掩護する任務で　〇〇台に陣地を占領し

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

準備完了　良き敵こざんなれと待機してゐましたが　既に敵部隊は逃走の後で　二三の残敵を見受けたのみでした

零時頃戰果の跡を見るに　敵遺棄死体二百余　揚子江岸に沿ふて倒れてゐました



国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

目次

疲労を押して道路偵察　歩十三、四　上田中尉
老人の冷水今更感謝　歩十三、三　金子曹長
擂架の上から「慢々的」にと　歩十三、三　芦原軍曹
緊禪一番敵陣粉砕　歩一三、RiA　後藤軍曹
戦争にも運不運　歩十三、三　平田伍長
南京城門爆破の一勇士　歩十三、三　德永曹長
決死隊となりて　歩十三　宮原軍曹
南京陥ちたり　歩十三　五本部竹原上等兵
南京攻略まで　歩十三、一大隊本部座談會
南京の難民　歩十三、四　上田中尉

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

疲労を押して道路偵察

歩一三ノ四　歩兵中尉　上田秋雄

紀村にて十一月三十日南京に向ふ急追命令が下り　翌日から毎日行軍が續きました其の行程は左の通りです

月・日	出発地名	到着地名	出発時刻	到着時刻	時間	距離
十二月一日	紀村	湖洲南方部落	〇七・〇〇	一四・四五	七・四五	三〇
〃 二日	湖洲南方部落	長興南方	〇七・〇〇	一五・一〇	七・一〇	二八
〃 三日	長興南方	上泗安	〇八・〇〇	一五・二〇	七・二〇	二八
〃 四日	上泗安	湧城鋪	〇七・〇〇	一八・〇〇	一一・〇〇	四〇
〃 五日	湧城鋪	梅諸鎮	〇八・四〇	二一・〇〇	一一・二〇	四〇
〃 六日	梅諸鎮	梁[illegible]駅 夜行軍にて 翌七日二時出発	〇七・三〇		一六・三〇	六〇
〃 七日	梁[illegible]駅	溧水			二一・〇〇 六・三〇	二一〇
計						二七四

十二月五日迄は大して苦労もありませんでしたが　六日の一七〇〇頃豫定の部落に着きましたので

「やれ〳〵今日もこれで宿営出来る〳〵」

と喜んでゐると　大休止二時間の命令が下り　夕食を済ませて朝食を準備し　愈々夜行軍になりました

二一〇〇路上に於て

「師團ハ本夜五十分行軍ジ十分ノ休憩ニテ一路南京ニ向ヒ前進セントス」

の命令があり　それからの行軍が急で中隊で十名も落伍者があった程です

何しろ夜間の事ではあり　何處で落伍したのか判りませんし　幹部の心配は一方ならず　分隊長などは休む暇もなく人員點呼をし　遅れた者を見に行ったりなどして實に苦労して居ました

溧水北方に於て　約一時間大休止し大路上

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

に於て家屋を利用し七日の〇九、四〇より一、三〇迄大休止し晝食を終つて錦口鎮にて軍靴の配給がありました

一六、〇〇に秣陵関附近の無名部落に宿営することになり　落伍者を收容して宿舎の割當も終り休憩せんとする時　大隊長十時中佐殿と中隊長松岡中尉殿が來られて

「御苦労ぢやが師團は今夜〇一、〇〇に宿営地を出發して東善橋に行くので　君にその道路偵察をして貰ひたい」

と言つて地圖を擴げ道路に色鉛筆で印しを附け

「現地は向ふの町が秣陵関これから約四粁で　其の町端れから左に道を取つてあの山の左を通りまた一つ向ふの山の間に大きな道路があるからその間の小径の破壞の有無及大きな道路の有無を偵察し〇一、〇〇迄に報告せよ」

といふ命を受けました　其の時は胸がドキツとしました

（これ迄やつと來て兵は皆夕食の準備も出來ない程疲れてゐる　その上にこんな重大任務　今から二十五粁位の道が歩けるだらうか）

と非常に心配しました

上司の命に依りまして小隊は秣陵関に至り

第一第二分隊の二個分隊を斥候に出し

第三第四分隊を宿舎に殘し連絡下士関田上等兵に後事を頼んで　斥候は軽装し乾パン一食分を持つて秣陵関の町端れに至り　工兵一分隊を併せ指揮して二〇、〇〇小径に入りました

右前方の方で夕闇の中に盛んに銃砲聲がしてゐましたがどん〳〵前進して一時間も歩くと　ある民家に辿り着き　土民を探し出して敵の有無を尋ね　暫く休憩した所が皆

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

疲てしまつて起き上らうとしないのです
大喝して元氣づけ又前進しましたが　三十
分と歩かないのに三十名余りの者が三百か
ら五百米位いにも隊間が長くなり時間はか
かりし
（これでは折角の苦労も報告が遅れては一
大事）と思ひ意を決して健脚者を集め爾余
の者を現在地にて警戒させましたら　集る
者僅かに四名でした
第一分隊長　高橋公義上等兵　後任長進級　田家鎮にて戦死
第一分隊一番　中野照上等兵　田家鎮にて戦死
第二分隊長　福山弘進伍長　軍曹進級　内地帰還せり
第二分隊一番　荒川巽上等兵　軍曹進級　内地帰還せり
この四名を連れて前進し時々停止しては動
静を窺ひ一躍進々々々して　遂に本道の三
叉路を発見し　本道の破壊されてないこと
を確認しました
（これたら師團は前進出来る）
と三叉路に標示をして五人は闇の中で小聲
で
「良かつた」
「良かつた」
と言ひ合ひ　高木上等兵が
「小隊長殿良かつたですなあ」
と感極つた調子で言つた時には涙が出ました
五名は休む暇もなく引返し殘した兵全部を
連れて宿舎に寢ませ　唯一人大隊本部に行
き報告しましたのが午後〇一、〇〇でした
以前の命令の様だつたら私共は報告すると
又前進せねばならない筈でしたが　命令が
変更されて〇六、〇〇出発になつてゐました
ので一寸一休みすることが出来ました
そして翌日は尖兵となつて昨夜の苦労を偲
びつゝ東蕎橋に着きましたが　こゝでは百
十四師團が戦斗中でありまして　尖兵が此

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

處を通ってしまった頃　秋山参謀殿が
「道が違ってゐるぞ」
と言はれたので
「いや決して違ってゐません東善橋はこれです　あの入口の所に東善橋と書いてあります」
とその時は強く言ったら
「さうか」　それでは前の部隊はどこの部隊か」
と訊ねられ
「百十四ですが」
と言ったら　又自分で馬を飛ばせて連絡に行かれました
ホッとしました
今になってもこれ程辛い行軍はありません

老人の冷水　今更感謝

歩十三ノ三　金子曹長

父が「青島攻略の時　戰友が財布を胸の物入れに入れておいて助った例が澤山あるから　お前も入れなさい」
と言ってくれたが　そこは若いだけに
「なあにそんなことが信じられてたまるものか　財布なんか何處でもいいんだ」
と多寡を括ってゐました
一度南京攻略の前　これ迄飲まず食はずの強行軍の為　袴の内囊に入れてあった財布が　股き擦って痛くて仕様がない　それかといって別に入れ所もなし　寒いので胸の内側の物入に藏い込みました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

そして十二月九日水口部落に途中地雷や砲弾等を見舞はれたがら着りたのであります

その時指揮班の北川一等兵が、

「敵らしいのが居ます」

といふので出て見ますと成程宿舎前一〇〇米程の所に青い服を着たのが居る それで銃を取りにやりました

傍には宗軍曹と中隊長殿の當番が居ます

二中隊の兵隊が

「あれは友軍でありますし」

と言ひますので よく見てゐますと八十米附近を這つて來る樣でした

突然 パーンと狙撃されました 途端に左肘を棍で打ち折られたやうに感じた それでパッと家の中に走り込んだが 他の者は一向に氣が附かない

そこへ丁度銃を持つて出やうとする北川一等兵がこれを見て

「やられましたか」

と言ふ これを聞つけて宗軍曹など飛んで來ました

それで 早速左肘を切開した 仔細に點檢してみますと 弾は先づ右前盒の右角を少し突抜けて上衣の胸物入れを貫通してゐます ハッと思つて財布を出してみると これは滅茶苦茶になつてゐる

この弾は更に 襟袢には全然觸れずに左肘に中つて服の中で止つてゐました この時は思はず愕然としました

當然これは前盒などに中らなければ 眞直ぐ腹を貫通するか 或は心臓をやつてゐた筈なのであります

後で一人になつてから 父の言つた事に對しては 全然耳も傾けず 只知らず〳〵のうちにこれを守つて 命が助つたことに

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

對して　思はず男泣きに泣きました
年寄の言ふことは守るべきだと　この時程
痛感したことはありません

擔架の上から「慢々的」にと

歩十三ノ三　　芦原軍曹

普通吾々がお互同志の中でよく使ふ支那語
の中に「慢々的」といふのがあります
この言葉が如何にもしっくり當てはまった
一例です　などゝ言っては實に相濟ぬ訳け
ですが
森田一等兵が胸部を貫通されて　パッタリ
倒れました
驚いて駆け寄って見ると
血がふいて見る〳〵内に青ざめて行きます

悲痛な中にも　戰友達が
「しっかりせ　〳〵」
と激勵します
運良く衛生隊が直ぐ來ましたので　擔架に
乘せて收容して貰ひましたが
苦痛をこらへて
「有難う〳〵」
と氣丈な所を見せてゐるのも涙ぐましいば
かりでした
いよ〳〵擔架にかつがれて走り出そうとす
る時です
「おい慢々的にやって呉れ」
と申しました
時が時　場所が場所　悲痛な氣分がたゞよ
う中にしかも重傷者の口から出た
この「慢々的」はとても日本語では表現出
來ない樣な味がありました
私共は誰にともなく

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

「慢々的な 慢々的 な」
と繰返しました

砲撃戦一番
敵陣粉砕

歩十三ノ一八八

歩兵軍曹 後藤 満良

十二月十日南京雨花台の線に進出した我々は直ちに戦斗に参加しました
我が陣地から敵情を見ますと 稜線には點々とペトンで固めたトーチカがあり そこには重機が銃身も熔けよとばかり火を吐いてゐます
小隊長村山政俊准尉殿は観測班の位置で弾丸雨飛の間に 厳然と立つて敵を睨んで居られます
「さあ あのトーチカを片ッ端しから打潰してやるぞ 我が聯隊砲の威力を見ろッ」
と第一弾をぶッ放しました
眼前千米のトーチカは 見事聯隊砲の一弾で沈黙した と思はれたが 否弾着が十数米も近い 依然としてトーチカからは重機が火を噴いてゐます
(今度こそは)と 第二弾 然しこれも外れてしまった 續いて第三弾 第四弾 皆横に外れてしまつて どうしても命中しません
突然 小隊長殿が
「分隊長 三番四番砲手は自分の罩れに手を當てゝみろ」
「?」
「罩れが縮み上つとらんか ハハハトトトー」
敵弾雨飛の間にもこの諧謔を交へた一言は兵隊達にどんな影響をあたへたことでせう
焦りに焦つてゐた氣持が水をかけられた

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

やゝにグツと落ち着いてきました

四番砲手は、

「こんなものは照準の邪魔になる」

と鉄帽を振り捨て、今度こそほと自信に満ちた笑顔で分隊長と振り返りました

小隊長殿の射撃開始の号令下るや第一弾は発射されました、見事に命中です続いて第二弾、第三弾、眼前数個のトーチカは見る〳〵内に沈黙してしまひました

南京攻略戦の聯隊砲の殊勲は村山准尉殿のこの一言に依って成ったのであります

戦争にも運不運

歩十三・五三　平田伍長

雨花台の攻撃の時であります　十二月十一日の晩夜襲をして占領し、早速散兵壕を掘りました

當時私は初年兵でありましたので、せつかく拵った散兵壕を古兵に渡して、又の方を掘って居ますと敵の弾の集中射撃をうけます

之はいかんと伏せて見ますが、壕が未だ浅いので危いこと夥しい、ふと右を見ると分隊長の高木伍長殿や平沼伍長殿達が深い壕の所に居られます

人間を言ふものは浅間しいもので、一寸羨しくなりました

其所へドカンと砲弾が落ちて、自分は土の中に埋り之はテツキリやられたと思ひました

暫くして土をはねのけて見ますと之は大変砲弾ぼ壕の深い所に落ちて、分隊長始め四五名の古兵殿達が一ぺんでやられてゐました

0645

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

全く戦争といふものは運だと思ひました

南京城門爆破の一勇士

歩十三ノ三

徳永曹長

昭和十二年十二月十二日二三、四〇工兵第六聯隊の平石少尉殿の小隊が　南京城南門の爆破に前進し　城壁に爆薬を仕掛けて　決死隊が導火線に点火して待期してゐました

すると後二十米といふ所まで燃えて行つた頃　これが援護射撃をやつてゐた友軍の機関銃の爲　導火線が切られてしまつた

それで平石小隊は城壁下に詰めかけたが

突然一人の兵が壁に取つゝき　切られた導火線に点火したのであります

決死です

導火線も後僅かである

轟然たる爆音と共に城壁は吹々飛び　彼の兵の姿はどこにも見えませんでした

斯くてこの城門爆破に成功したのであります　続いて我々は破壊口目がけて突入しました

この時の一兵士の豪膽　そしてその責任観念　犠牲的精神こそ實に軍人の華といふべきであります

決死隊となりて

歩十三

歩兵軍曹　宮原清人

暮れるに早き冬の日は既に黄昏れて仰ぎ見る一面の空は　彼方此方に銀色に燦めく星影も凍り　霜夜の酷寒を凌ぐに心患はすや

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

うな感傷を抱きつゝ部隊は一路南京へと軍馬を進めました

連日連夜全くの不眠不休で身体の疲れ脚の痛みを戰友相互ひに勵まし慰め合つて首都の手前四五里にまで進出して來ました　敵が誇る首都南京だけあつて大小無數の砦トーチカ　掩蓋銃座等一大要塞を爲し近代的裝備を凝らした堅壘無比の陣地は實に難攻不落とも稱さるべきでせう

かくて我々は敵の最前線　雨花台トーチカ陣地の攻撃を開始しました

それと覺つた敵は無數のトーチカ内より物凄い射撃を浴せて來ます　日軍幾萬來るとも一歩も寄付けん意氣は亂射亂撃となり遂にこの日も對戰の儘暮れました

夜に入るや敵の猛射は益々熾烈で霜凍る露營の間も敵前數百米に於ては當々として陣地構築に余念がありませんでした

夜がほの〳〵と明け初める頃　敵は尚も死者狂ひに射撃を浴せて來ます　正しく敵はこざかしくも死守を覚悟しての奮戰振りと見受けられました

陣地は戰友の血潮に眞赤に染り　皆血走つた眼で射撃して居ります

隊長殿は

「何時までやつても限りがない」

と思はれたか　我が分隊もこのトーチカ占領の決死隊に選ばれ　最後の突撃に移りました　正面攻撃です　戰友は四辺にバタバタと殪されて行きます　然しそんなことに氣付く者は一人も居ません　前へ〳〵　三線にも張り回らされた鉄條網を乘越えると遮二無二トーチカ陣地に躍り込みました

かくて雨花台陣地の一角を占據したのであります

望み見る南京城　あゝこれこそ幾多の戰友

0647

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

が泥に塗れつ血に塗れつ　唯一筋に馳せつたのはこの南京城に日章旗を打立てんが為ではなかつたでせうか

我々は澎湃として流るゝ感激の涙をどうすることも出来ませんでした

愈々最後の城壁攻撃に移りました　砲兵は盛んに内や城壁に砲弾を射ちかけてゐます

私は再び決死隊員として城壁占領の任務を受け敵の猛火をかいくぐつて壁下に漸く辿り着きました

誰か、バラ〳〵ッと城壁の方に走つてきます　工兵です

これを見た敵は物凄い射撃をしてきます

幾人か殪れました　尚も走りました　城壁に接近して行きます　今度は敵は壁上から手榴弾を雨と降らし始めました

工兵はそれにも屈せず城壁に取附くと直ちに爆薬の装置にかゝりました　五分　六分　我々のジリ〳〵する氣持ちも長くはありませんでした　忘れもせぬ十三日午前一時三十分戰場の夜空に　天地も覆さんばかりの大音響が殷々として轟き渡りました

機を逸せず我々突撃部隊は群る敵中に突入之を撃退せしめ遂に一角を保持しました

思へば二度も決死隊に選ばれ幸運にも負傷もしなかつたのでありますが　それと共に南京の地下に眠る戰友に心から敬虔な感謝を捧げるものであります

南京陥ちたり

歩十三　五ノ　本部

輜重兵上等兵　竹原　安熊

十二月九日南京は既に完全に我が掌中に包囲されました　此の時勸告文が投降されま

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

したが十日に至るも何等の返答が無いのみか却って猛烈な應酬を受けました
遂に我攻撃陣は決然起つて猛攻を開始しました　彼我の銃砲聲は殷々として響き跳彈は我々の頭上をかすめ　時々砲彈も附近に落下します
我々は唯車輛を遮蔽して　進み行く戰果を眺めるばかりです
聯隊本部と第一大隊大小行李は　夜陰に乘じて一線へ送る握り飯の準備に大童です
自分達は其の必要はなかったが　戰友の張切ってゐるのを見ると　何んだか身内が躍動するのを覚えました
我々は行く戰友の成功を祈りつゝ
「おい氣を着けて無事帰って來りよ　御苦勞だねしっかり頼む」
「有難う　左アに支那の彈丸では死なんよ　糞食へだ」

皆元氣で朗かに顔に微笑さへ浮べてゐるのです
間断なし銃聲は依然として續いております
底冷えのする夜です　深く霜は戰渦の中にも降りてゐます
大行李長殿の話では　今十三聯隊は兩花台附近を攻撃してゐるさうです
敵國の首都だけあって仲々頑強な抵抗振りです
明けて又夜となり益々銃砲聲は激しく　深夜の空高く多分城内に火災でも起ったのか赤々としてゐます　遠くではこの夜氣を通して突撃の喊聲とも萬歳とも判らぬ聲が銃砲聲に交錯して何回となく潮鳴のやうに聞えて來ます
夜明けと共に彼我の銃砲聲は遠のいて行きました
嗚呼遂に南京城は陷ちたのです

0649

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

「一番乗りは可愛だらうね」
「そりや勿論十三だよ」
「うんさうだ〳〵」
「萬歳」
「萬歳」
と、して十三日夕刻　中華門前に立つた時翻
翻としてひるがへる日章旗　鋸の歯のやう
な頑丈な城壁の崩壊　累々たる敵の遺棄死
体を見て　第一線部隊の苦斗を偲び思はず
胸が熱くなつて鼻の頭がズキンとしました
私は續いて城内に入りました　惨憺たる
市街　所々に火災を起して濛々たる煙は冲
天に舞上つてゐます
「これが首都南京か」
と思ひました　裏道で突然支那人が逃げや
うとしました
私は一ハツとして銃を構へて
「こらッ」
と大喝しました　その支那人は地面にペタ
ツと座つたと思つたら手を合せて何やら言
つて盛んに頭を下げております
「ハヽア　助けてくれと言ふのだな」
身成りも乞食の様に哀れです
「你　彼方へ行け」
きよとんとして居ます
「你　去々」
「謝謝」
又頭を下げだしました
敗惨の民は實際哀れです　自分は又も進ん
で行きました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

南京攻略まで

歩十三ノ一大隊本部
座談會より

嘉悦曹長

南京に向ふ行軍中、さすがは第六師團の兵だと思ひましたのは他所の師團の兵は騾馬や水牛に裝具を積んで まるでまる腰で三々伍々行軍して居ます 隊伍堂々と押して行つたのは六師團だけでした 其の時ですが見ると他所の師團の兵が新品の大隊旗をかついでトコ〳〵やつて來る

「お前どうしたのか」

と聞きますと

「はぐれちやつて仕し」

と言ひます これには顔負けしました

上田伍長

水牛と言へばこんなナンセンスもありました 丁度其の行軍の時なんですが やはり他所の師團の兵が水牛を引いて行軍して居たんですが それがクリークのそばまで來ると ザブ〳〵とつかつて引けどたいけど動こうともしません、之には笑はされました

高島曹長

南京城攻略の時は 前々日よりの終夜行軍なので南京城についた時はがツパリして仕舞ひました

有馬少佐

將軍山 牛首山なんかの敵は今迄のと違つてとても強かつたです、其の時始めて三中隊の下士官が附設地雷でやられたのを見ましたが案の者なものでした

0651

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

牛首山の戦斗で非常に苦戦しましたが　それは一緒に戦斗する筈の百十四師團が行軍が遅いため間に合はず　十三聯隊丈で戦ひました　道路標に十八粁　十七粁と書てあります　それを讀み〳〵行く前進の愉しさ　杭州湾上陸以來の苦労の數々　汗にまみれた軍服ではあれ武士の喜び　何とも言はれません

聯隊長殿が

「君こんなものが出來たよし」

と言はれて手帖の端に

南京も　一二、一二で陥ちにけり

と即興の句を示されました　だいたい十二日に陥ちる樣になって居たのです　敵が頑強で一日遅れましたが　すかさず先の句を

南京も　きょう二〳〵で　陥ちにけり

と訂正されました樣です

嘉悦曹長

南京の城壁の見えたのは十一日の晩方九一、三高地附近の處でした

その時は　寒の間にも忘れなかった敵の首都を目前にして　永い苦心も何のその死んでも好いと思ひました

南京では女の兵隊が居ると言ふ事でしたが見た事はありませんでした

然し正則掩蔽壕の中に入ると女の品物がだいぶん見つかりました　華奢な飯盒や靴なんて一式揃へてある處も見ました

中華門に入った時が十二日　雨花台附近をとった時からはあまり射ちませんでした

百十四聯隊の軍旗以下一番乘りを辛つたものです

瀬脇輜重兵曹長

南京攻略の時　始めて第一線に握飯補給をやりましたが　最初一、八〇〇握り　又後

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

を握りましたが　二日半一睡もせずに握り通しました

永い連日連夜の行軍で兵隊の手は真黒でありましたが　終ひには手がふやけてはれ上り　きれいになって居りました　それを第一線に運搬する兵の撰定に困りましたが　それは行きたくないと言ふのではなく皆行きたいと申しましたからです

有馬少佐

あの時の真黒な握り飯は甘かった　日の丸辨當もあんなに甘いなら　非常時の經濟も非常にやりよい事だらう

山本衛生曹長

自分達は九一三高地に居た時　握り飯の補給を受けたのですけれど　これは有難いと一口入れた時に砲弾でドカンとやられ一発の砲弾で約二十名やられました　茫然自失之はいかんと　早速轉手古舞して治療しましたが　坂井大尉殿や井上中尉殿を亡ひ　悲惨なものでした　それだけに握り飯は忘れられません

高島曹長

色々と犠牲者を出して　時に苦肉の策を用ひて南京をとりましたが　城壁の上に登った時は萬感交々迫ってあの時の涙は何の涙か判りません

南京の難民

歩十三ノ四　上田中尉

南京の難民は　我が軍が入城した當時凡そ八万人位でした　全部外國權益下に居ました　從って日本の軍人も　公用以外には彼等のある所へ立入ることが出来なかったの

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

です

警備を擔當して居た私は巡視の名目を以て始終難民區域を見て廻つたのですが　彼等はもうそこで環境に順應した新しい生活を營んで居る　街路は老幼男女で芋を洗ふ樣に雜沓し　必然の要求に應じて街路のある部分は　廣い露天市場と化し　道の兩側にはいろ〳〵の食べ物や　古着類や　荒物や金物を商ふ露天が蜿蜒として並び　賣る者も買ふ者も生活力の溢れた眞劍な顏で喧嘩つたり　叫んだり　賣り聲をうたつたりして居るのでありましたそこには生活の必需品の外に子供の玩具店までも出て居りました

彼等には　もう過去の事を悔んだり悲しんだりする色がなかつた

現在に生きねばならぬ　たゞそれだけで必死になつて居るのです　彼等にとつて既に燒失した財産や　生死のわからない家族知友はもう問題ではない　そんなものはいくら嘆いても悲しんでも歸つては來ないのだ　信じ得るものは　唯現在ある狀態しっかり掴んで居るもの丶外には何にも賴にならぬ　過去つた事は仕方がない　そんな風に彼等は考へて居るらしいのであります

實に旺盛な生活力です　それは千切つて捨ても　踏みつぶしても　毎日その根を拵つても根を張り芽を出さずには居ないナラガ栗のやうな生活力であります

この生活力が支那人の持つ强味です　漢の統治者を失ひ　蒙古人が來て支配しても滿洲人が來て君臨しても　何百年とも知れず群雄が割據抗爭しても　軍閥の内亂がいく度繰り返されても　彼等自身の國家が長い間消滅しても　猶且つ民族としての純粹

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

を維持し
同じ土地を維持し續けて　決して亡ぶといふことがないのは　唯この旺盛な不知身の生活力があるからであります
若し彼等にこの執拗な　そして旺盛な生活力がなかったら　彼等は夙くの昔にユダヤ人の如く世界に分散してしまった事であらう　このことは　あるひは支那人の文化の度の低いことを意味するかも知れない
彼等が人間的でも動物的でもなく　むしろ植物的であるといふことを證明することになるのかもしれません
しかしそれにも拘らず　私は彼等の民族的な特性に興味以上のものを感ぜずには居られませんでした
彼等は危險と思ふものから　身を避けることには本能的な鋭敏さをもって居る
杭州湾上陸以來　私は女達が……特にモダンでない普通一般の女達が……墨や油や泥を　顔や手足や肌に塗り　殊更に臭氣を放つ様な襤褸をまとって　我が軍の入城を迎へるのを知って居ります
彼女等は外聞だの見栄だの　そんなものを念頭に置てゐなかった　なるべく醜悪に卑陋に見える様に努めて居ました　それは言ふまでもなく彼女等の自衛行爲である
女達は日本軍の軍紀の嚴正であることが完全に納得できる迄は　容易にその生地を表さない
日本の兵隊は　支那の軍閥の兵隊とは全然素質が違ふのだといふ事が諒解できると
それから徐々に生地を出し始める　黒い顔が白くなり　汚織い服が綺麗な服に変るのであります
南京の難民地区でも　私はやはりさうした女の移り替る姿を見る事が出來ました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

醜婦の巣窟のやうに見えたのが いつか常態に歸り やがて美しく着飾った 輝くやうな美人を路上に屢々見受くる樣になりました

歩十三 有馬少佐

神去りし五百の御靈にぬかづきて
我等も誓ひ慕ひ進まん

朝暮れを共に勵める つはものら
過にし三歳なにか忘れむ

歩一三ノ三 河野中尉

建國の 帝樹てます大理想
振ひ立てめや 皇子の子孫は

橋本信一

砲彈に 両手奪くした武夫の
雄しく笑めり 紅にそまりて

穴井 貢

亡き戰友の 墓標に捧げ 野辺の花

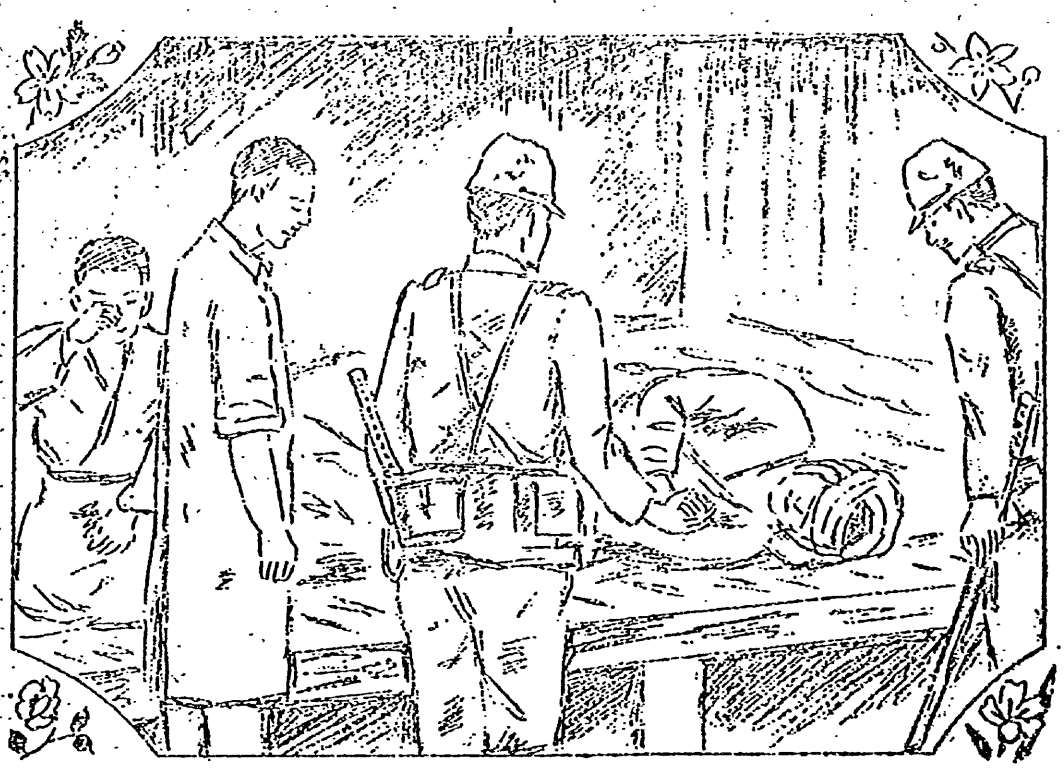
九山安雄

戰場や 霜の朝の 寒さかな

浦上義雄

前線の 塹壕の中 母の夢

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp



目次

○侍從武官の御見舞　第一野病　軍中　義木鶴雄郎
○病室に歌ふ「君が代」　第二野病　橋本衛生伍長
○藤原參謀の負傷　第一野病　衛軍　清水正夫
○「蟲が取れた」と喜ぶ患者　第二野病　衛上　三好愛文
○南京陥ちたり　第三野病　衛伍　肥後常雄
○病室に咲く美しき兄弟愛　第三野病　衛軍　松野耕少
○苦心の握り飯　第四野病　衛軍　田尻　茂
○給養の苦心　第四野病　江夏主計中尉
○一杯の水　第四野病　衛軍　岩下國康
○「閣下お顔を見せて下さい」　第三野病　衛軍　宮原岩雄
○百名の患者を擁して敵襲を受く　衛生隊　歩中　野八熙
○重傷の患者は何んと幼友達　第四野病　衛上　吉永九門

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

侍從武官の御見舞

第三師團
陸軍中尉　荒木貞夫

南京攻略戰の折　私達の部隊は師團の最後の梯團として續行してゐました。

十二月六日夜急命が來て

「情況急を要す」

といふのでそれから急行軍に移り　追及といふことになりましたが　却々先行の部隊に追いつけません

十二月八日遂平と溧水との中間に到着しましたが　未だ連絡はとれないので　翌九日私は命を受けて下士官兵數名を伴つて騎馬と自轉車で出發しました

（溧水に着いたがまだ連絡はとれず（どうしやうか）と思つてゐると　丁度其時友軍の飛行機が來て　溧水の郊外に通信筒を落すのが見えたので（何かの連絡機関がありますのではないか）と思つて其の方に行つてみると　兵站関係の連絡所があり

「前線の戰況は大いに進捗し　第六師團の正面が最も有利で　師團は既に南京南郊四里に迫つてゐる」

といふ情報を得ることが出來ました

この報を聞いた私は胸の躍るのを覚えましたが　一方自分の部隊のことを思ふと（この儘ではとても南京攻略に間に合ひさうもない　何んとかしなければならないが　要は先づ師團と連絡をとることだ）と思ひましたので　設營の方は下士官以下に任せ部隊には

「可及的に急追せよ」

との連絡をとらせた上　私は單独で師團追及に決心しました

所が足がない　暮れ近くなつて一人自轉車では心もとない　思案してゐる所へ折よく軍參謀の乘用車が通りかゝりましたので

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

餘裕もありませんでしたが無理に願つて乘せて貰ひ　陸陵園で下車しました

此処になると戰斗部隊が動いてゐて　六師團の部隊も目につきましたので　探してみましたが　師團司令部は既に前進してしまひ二里位ひ先に出てゐるといふことです

そこで私は　更に追及を決心し　他に便がないので徒歩で　初は半ば小走りで　気背ひ立つて出發しました

途中にはもう部隊一主として大小行李の落伍者が夫々と續いてゐましたので　不安もありません　盛んな銃砲声が近付いて気が立つて來ます

丁度日暮れ時　ひどい空腹と則れない行軍で疲れを覚へながら　東喜橋に達すると其処に師團司令部があり　既に第一線病院は開設し百余名の患者を收容してゐました

（これでは自分の部隊は隨分遅れてしまつてゐる）と思ひ早速軍医部に出頭すると

「遅い」

と言つて叱られました　今となつては仕方もないがまだ最後の手段はあるといふ訳で　明日自動貨車一輛を借りて部隊の所要人員材料を急進せしめやうといふことになりました

自動車なら明日午前中には追及出來る南京の攻略もいくら早くとも未だ一両日かかるに相違ないから　これで部隊の面目も立つと思つて安堵しました

其頃彼我の銃砲声は愈々盛んとなつて（友軍が不利なのではあるまい）と不安な様でした　疲れの為いつしか眠つてしまひました

翌十日未明自動貨車を借りて逆行し　秣陵関南方で部隊に出會ひ　先遣班を編成し再び急進して丁度正午　東喜橋から更に一

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

里程前進してゐる師団司令部の位置に並及することが出来ました

當時戰況甚だ沍澤で　銃砲声は耳を聾するばかり　全く戰火の只中に飛び込んだ思ひです

其処は南京郊外の丘陵陣地で　正面には二十三と四十五が出てゐましたが　凹地を挟んで彼我相対峙し　目の前のコブには友軍の重砲が布陣して射つてゐる　これが射つ度に地揺ぎがして誠に爽快です

盛んに流弾が來るので遮蔽して待機してゐると　友軍の爆撃機が來て南京の上空を旋回しつゝ急降下爆撃をやる　高射砲の黒煙白煙が矣々と空に増して見る間に友軍機の周囲を埋めてしまふが　一機もビクともしない頼もしさ

だが次には　目の前の砲陣地に土煙と爆音とが同時に凄じい勢で湧き上った　續いて數發炸裂して物々しい有様です　残念にも敵弾が命中したのだと云ひます　西暑備の北端の一軒屋に繃帶所が開設されてゐて其処から擔架が出てすぐその傷者を收容してゐるのがよく分ります

（愈、來るな）と思つてゐると　繃帶所引継ぎ病院開設の命が下りました

「それッ」

といふわけで直ちに作業を開始する　當時引継ぎ患者が約六十名ありましたが　尚引續き患者は搬入されて來ます

所が困ったことに処置材料は不足ない程度に携行してゐたのですが　給養上の材料が來てゐません（現場に利用する物は無いか）と探したが　其処は搾油工場で土間造りに窯も全く破壞されて了ひ　唯屋根があるに過ぎません

仕方がないので藁、籾殻等を持つて來て敷き　患者を寝せ　戸板を並べて治療台を作るといふ有様　食器も足りないので食事

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

は握り飯に拵へてやる　又傷者が寒がるので　探してみると油粕が澤山ありましたから　之に火をつけると仲々よく燃える（これはいい）といふので焚いてやりました

然し人員が少いので之等の作業が却て捗りません　患者は續々到着して來る　砲創が割に多く鮮血淋漓とした患者が呻吟してゐる　誠に繁忙なことゝなつた

夜に入り　入院が一寸杜絶えて必要な處置を終つたのは　夜半を過ぎてゐました

銃声は尚盛んとなり前後左右に聞えて時には次第に身に迫つて來るやうに思ひたりして　一沫の不安を拭ふことが出來ませんでした

其夜はそんな状況で　交互に藁を被つて假眠して過し　翌十一日は又同様な有様

然し戰況は遂次有利に進展し　午前には全く正面の高地を制圧して　部隊も

「前日前進した繃帶所が　二粁前方で患者二百名收容もてゐるから　病院は前進して之を引継ぎ　繃帶所を推進せしめよ」

との命が來ましたので　病院長殿は早速偵察に行かれました

其後私が主となつて業務に從つてゐますと　丁度其日の午后四時でした　師團高級副官殿がツカ〳〵と院内に入つて來られ

「侍從武官が　お見えになつた　病室に御案内申上げよ」

と言はれました　思ひもかけない余りにも突然なことなので　其の瞬間私は身体まで硬直して了ふやうに感じました

而も更に畏いことには　すぐその後から侍從武官は　そのむさ苦しい陰鬱な搾油場の病室にお入りになつて　藁の上に　微發布團や天幕や採取したばかりの棉花の束などを被つて　呻吟してゐる傷者を　個々に御叮嚀にお見舞ひになりました

ひとり自分の恐懼に堪えなかつたのは

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

頭部貫通銃創の意識朦朧した患者が　大きな声で

「林檎が食ひたい　頼む　林檎を採つて来て呉れ」

と叫んだのを聞き止めになつたことでした

「一通り御見舞ひの後

この状況を見せに」

と長い御言葉を賜つて　直ちに御發ちになつたのでありますが　その御姿を拝し辱なさに私は直立したまゝ　暫くは動くことが出来ませんでした

病室に歌ふ「君が代」

第三野病　橋本衛生伍長

南京攻略の際第三野戦病院は　愈家村に開設してゐました

その時の收容患者であつた某上等兵は頭に砲弾破片創を受け　一杯の繃帯で口と鼻だけ出してゐる重症でありながら　気は確かなもので手術後病室に收容されましたが　流石は九州男子でその態度は立派なものでした

護送しで来た同僚に對して

「俺は大丈夫だ　俺のことは心配するな

君達は第一線に帰つて

陛下の為め　國の為め　そして俺の分まで又一つは尊い犠牲者の分まで働いて仇を討つてくれ」

と言ひ終るや荘重な態度で「君が代」を歌ひ出しました　悲痛とも何んとも言ひ難い底力のある声で　並居る者は皆眼を濡らしました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

藤原参謀の負傷

第一野病　衛生軍曹　清水正夫

上陸以来瞬く間に南京城外に近迫しましたが　連日連夜しかも一日二十里近くも行軍する日がある程で　身体は續いても足が言ふことを聞かぬといふ風で　皆疲労の極に達し早く病院開設の命が来るのを待つ位でした

さすがは首都だけあつて　各防禦地を突破して約三里の地点迄迫りましたが　愈〻城壁近くなると敵の防禦堡壘とみえて　彼我の銃砲声は猛烈の度を加へました

某新聞記者など

「現在の状況では一週間か十日位はまたかかるだらう」

と言ふ者までありました

怒流が堰止められたやうに前が停頓したため　後方は各部隊で一杯になり　道路には砲車や車輌が溢れて前進出来ず　休憩する場所も無い位でした

私達も霜の眞白く下りた田の中に休み附近の薪を集め昨日夕方炊いた冷飯を温めやうとしてゐたところ　病院開設の命が下り　各部隊や車輌の間を抜けて前進し　一寸行つた所の東善鎮で九日早朝衛生隊の繃帶所を引継ぎました

引継いだ患者だけでも相当あつたのに一線からはどん〳〵負傷者が下つて来ますので　私達治療部は適当な部屋を探して治療の準備にかゝりました

戰禍を受けて散乱した家屋内を　病室係は片附け藁を附近の田の中から運び　患者の收容に對し擴張に夢中でした

私達も交代で　飯が喉を通つたか通らないかといふ位の忙しい朝食を済ませ　治療

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

をしてゐますと　何時頃でしたか記憶が判然しませんが　参謀の騎兵少佐藤原武殿が入院されました

一線で壕の中から戦況を双眼鏡で観察中右手に骨折の貫通銃創を受けられたのでした

暫かれて間もなく折柄治療の始まらうとする所に　谷師団長閣下を始め根岸軍医部長閣下方が見舞ひに来られ　傷を御覧の上御見舞ひの言葉をかけられる最中　声が詰りましたので一瞬シインとなり　其場に居合せた者は唯感極り治療の事も忘れたやうにしてゐました

あの光景は　今か今迄忘れることが出来ず　あり〳〵と浮んで来ます

この時は軍医部長自ら治療されました

其後藤原少佐殿は後方の上海兵站病院に退られましたが　どうなられたものでせうか

『蛆が取れた』と喜ぶ患者

第二野病　衛生上等兵　三好斐文

南京城外慈慧学校に　私達一半部の者だけで病院を開設した時のことです

私達は急行軍の連續で　身体は全く疲れ切つて居りマシタ　ソ等で休む者もあり　其爲僅かの人数で患者の世話にあたりました

患者の部室は二階造りの立派な建物で　私の受持は階下の　○○名で重傷が多数居ました

患者室に入つて驚きました　あちらからもこちらからも

「衛生兵殿　衛生兵殿」

と一度に呼ばれたからです（何んだらう）

と聞いてみると皆大小便のことばかり（こ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

れではいかん）と思つて洗面器を澤山持つて來て介配しました　然し身体が自由が効かず取つてやるのが大分でした　一時は大小便の世話だけで目がまひさうでした

一通り大小便も済んだと思ふと　誰かゞ呼ぶ　一人が呼ぶと皆が呼び始める　患者は苦しいのと淋しいのとで呼びたいのでせう

此時一番重傷らしい患者の所に行きます

と

「蟲が止つてゐるから取つてくれ」

と言ひます　見ると蟲ではなく胸部に大きな彈のあと　気管をやられ呼吸をする度に音を立てゐるのでした

軍医殿もお忙しいので私が圧迫繃帶をしてやると

「蟲がとれた　蟲がとれた」

と喜ぶ様は全く気の毒で　目頭が熱くなり顔をそむけずには居られません。でした

又或患者からは　故郷の話を聞かされつゝ泣かされました　或患者など

「幾ら呼んでも來てくれない　大体衛生兵はいかん」

などゝ苦しまぎれに怒つてゐる者もあります

こんな時など（これだけやつても…）と情けなく思ふ事もありますが又奮発心も起るのでした

あつちこつち廻つてゐるうち　大分元気のいゝ宮原といふ軍曹殿が呼び止められました　何事かと近寄ると

「君の姓は何と言ふかね　よくやつてくれる　衛生兵の任務も僕等が一線で銃を執るのと変りはない　いや　それ以上つらい任務だね　今初めて判つた」

と言はれました　私は　そつと室外に出ると人知れず感激の涙をふきました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

南京陥ちたり

第二野病　衛生伍長　肥後常男

十二月十日

急追撃に續く急追撃を経て　漸く南京城外一里の地点小倉里養療学校に前進　病院開設

戰傷患者多くさしもの養療学校も　どの棟も一杯でした

重傷の為に呻吟する患者　どの患者も数日来の空腹に苦えいでゐる有様でした　この尊い姿を見（我々の奮斗すべき時は今だ）と精根を傾けて看護に当りました

然し僅かの人員で○○○名の患者を抱へては　どうしても手が廻り兼ねました　中には余りの待遠しさに罵声を浴せる患者もありましたが　それも寧ろ我々の活動を励す声と聞きつゝ全力を注ぎました

午前二時四十分やっと一片附きして室外に出て南京城の彼方を望めば　彼我の銃砲声尚激しく　折からの寒風に只管友軍の安否が気遣はれるのでした

十二月十一日

未だ南京陥ちず　今日か明日かと待つが敵の堅城は仲々陥落しません　杭州湾上陸以来糧秣の補給はつかず　南京が陥落しなければもう患者に與へるものも無いとの話に　何んとも表現出来ぬ不安と焦燥にかられました

十二月十二日

南京未だ落ちず　彼我の決戦尚続んで到る所激戦が展開される有様です

あゝ記念すべき十二時　遂に南京は陥ちました

此の報が部隊に傳はるや　部隊全員患者

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

拳つて歓喜し　萬歳は思はず口から飛出しました　重傷の患者は擔架の上で叫び　繃帶だらけの傷の痛さも忘れて　手を取合つて嬉しさの余り泣いてゐる者もありました

十二月十三日

戰友の岩本軍曹と　衛生材料受領のため南京城内に行きました

城壁上到る所日章旗が翻つてゐました

勇士等が萬歳を叫んでゐました中華門の上で

内外に氾濫する敵の遺棄死体　門口を塞ぐ土嚢の山　高い城壁に架けられた大梯子　此の堅城突破に如何に友軍が悩まされたか　苦労の程が偲ばれるのでした

帰隊してこの感激を傳へると　戰傷の勇士達は腕をさすり歯ぎしりして口惜しがるのでした

それを見るにつけても私はふと思ひ出されて胸が苦しまるのでした

まだ南京の陥落せぬ内に息を引取つた尊い勇士等のことを……

「看護兵殿　南京はまだ陥ちませんか」

と苦しい息の下から問ひつゝ　りりしく護國の華と散つたあの勇士達の面影を……

病室に咲く美しき兄弟愛

第二野病　衛生軍曹　松野耕介

十二月十二日南京西南方一里半養蚕試験所に開設してゐる時のことです

朝は晴い内に皆蹴起き　朝食前に一通りの病室の清掃患者の世話　それが済むと患者の食事分配です

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

そのうちに入院患者はどん〳〵増し　食事一回の分配だけでも二時間はかゝります。食器は足らず　並食・粥食・粥汁の別に分配し　之を部室に運ぶ人だけが食事をもらえる。

「この部室は済んだか」

「食はない者は無いか」

「その患者は手が動かせぬから食はせてやれ」

等と一々見廻り　渡れなく終るのに声は嗄れてくる始末で　毎日の日課の中でも食事分配は並大低ではありませんでした

食事が済めば　早速治療室へ擔架に載せて運ぶのであります。それには病床日誌の一号紙の記入が出来てゐなければ　早速作つて治療室に廻す　一日に六十名位の治療しか出来ません　皆重傷で四肢の切断等特に多く　相当の時間を要する為であります

夜も十二時過ぎまで擔架で運び　其後十二名を各部室に當て不寝番に服務する　全く不眠不休の状態でした　顔を洗ふことなど夢にも思へないことでした　治療室へ運ぶ間は六人をとられ　後の六人で一人に五十人以上の患者を受持つておれば　小便に行く暇もない位でした

「衛生さん　小便を取つて下さい」

「衛生さん　水を飲まして下さい」

「衛生さん　繃帯を弛めて下さい」

とか

「大便です」

「傷が痛むから軍医殿を呼んで下さい」

「注射うつて下さい」

でそれは〳〵実に目の廻る様でした

「ハイ〳〵」

と軽く返事はしておても　一人を充分やつてゐると他の患者の所に一寸行けず　そのうちに擔架を持つて来れば載せ降しの手傳ひもせねばならず　全く困つてしまひました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

連日の看護に頭は痛む　少しは神経質にもなりますけれどこれが我々の本職です
気の毒は戦友を思ふ時　自ら励して奮ひ立ち真に親兄弟となつて看護の完全を期したのであります
然し多数の患者です　この懸命の治療も効なく護国の神と化する人も　毎日三名位ひを出し其の度に
「あゝ　すみません　申譯ない」
と心の中で力の足らなかつたことを詫び
「南無阿弥陀佛」
と口中に唱へ不覚の涙が溢れるのでした
以上のやうな日が八日間も續きました
其中で私が不寝番勤務につゐてゐた時の事を一つ申添へておきます
歩兵二十三聯隊から二組の兄弟が入院し
てゐました　名前は忘れましたがその一組の兄弟は　兄の方は頭部と脚部の軽傷で
弟は左上膊と脚部の重傷で身動きも出来ぬ重態でした
兄は自分に支給された毛布を弟に着せ
自分は眠りもせずに大小便の世話もしてやり　仲良く語り看護してゐる様は誰にも見出せぬ情景でした
そのうち弟の左上膊を切断されるに当り兄は快く承諾し手術に立會ひ　部室に帰つてから　二人して同じ病院に入院したことを非常に喜び　故郷の父母に送る手紙を頼まれて私は書いてやりましたが　これを故郷の両親が讀まれる時のようすを想像して私は書いてゐるうちに知らず／＼涙の溢れるのをどうすることも出来ませんでした
こんな立派な兄弟を見る時　第一線の守りは愈々堅く　それに對する私達の後方任務も又重大であることを強く思ひ　病室附の皆に話し　患者の看護に尚一層の努力を盡さうと誓ひ合ひました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

苦心の握り飯

第四野病
衛生軍曹　田尻　茂

十二月十二日自分は部隊長始め主計殿以下約十名に参加して　漢水を出発して夕方安徳門まで前進しました
一寸した凹地の一棟の藁屋根に　衛生隊が患者約六十名を収容してゐました。家の中に収容し切れぬ者が外にまでごろ〳〵してゐました
傷ついた同胞が呻みと飢に苦しんでゐる様を見た時　今迄の行軍に疲れ切つてゐた身体や足の痛さも忽ち吹っ飛んで
「早く患者を……」
と心は焦るのですが　本隊は今どの辺を来てゐるのかも分りません

患者を引繋りで一日も早く治療をし　又飯を与へねばなりません　患者に聞いてみますと三日も前から飯を食べてゐない者があるのです
（本隊が早く追及して来ればいいが）と首を長くして待つてゐても　却て来さうにありません
呪しいやうな　黒煙を吐く南京城の彼方に陽は落ちました
横手火厨殿の命で　患者の暖房用の薪蒐集に當りました　所が附近一帯は野砲、大行李の露営地で　薪一本すらも見當りません　仕方なく家屋をたゝき破り　やっと集積しました
さて　飯を炊かねばならぬ　所が多人は携帯口糧で間に合ひますが　本隊が到着しなければ六十人の患者の分は米がないのです
主計殿は附近に宿営してゐる部隊に　事情を告げ相談して廻り　衛生隊からやっと一俵

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

貰つてそれを自分で掻いで来られました
夕間は迫つて来ました
次は水です　水を探してみますが血と油と死骸と……そんなものゝ浮いたクリーク以外には水はないのです　贅沢を言つても居られません　水が無いのですから仕方なく釜を一つ徴發してやつと準備を整へました
丁度二十米位前方で　友軍の戰死者を火葬にしてゐる火炎が　もう〳〵と立ち昇つてゐます　敵は之幸いと此の火炎を目標にしたものか　盛んに砲彈が落下します
「火が見えぬやうにして飯を炊け」
と上官から叱られたり
ヒュ〳〵〳〵ヒュル〳〳〳〳ドガアン
と前後左右に迫擊砲彈を浴びつゝ　やつとのことで飯が出來上りました
これに食塩をつけて握り飯を作り　筏に入れて患者に一人一箇宛渡しますと　今迄は傷の痛みと飢にもだえてゐた患者が　目に一杯涙をためて受取り　身動きも出來ない重態の者さえ頭を上げて
「ありがたう」
と一言　そしてハラ〳〵と涙がその頬を傳はりました
今でもあの声が耳朶に殘つてゐます　患者の感謝に満ちた顔が瞼に浮びます
本隊が十時三十分頃やつと到着した時は全く百萬の援軍が來たやうに嬉しく思ひました

給養の苦心

第四野病　江夏主計中尉

南京郊外の安德門に着いたのは十二月十二日の午後でした　この時は病院開設準備のため僅かの人員が先行しました　そして

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

患者六十余名を到着後直に收容しました
経理室は私と當番と二人切でしたので
其夜の給養には困りました　車輌積載の
糧食は早くて夜中にしか到着しないので
間に合ひません　自隊員には携帯口糧で
炊事させるとしても　六十余名の患者に
は何んとかしてやらねばなりません
それで當番は薪を取りにやり　私は藏
寄の部隊に米を貰ひに出かけましたが
どの部隊も餘裕がなく漸く衛生隊から一
俵貰つて自分で擔いで帰り　クリークの
水で洗つて現地釜に準備したところに
當番が薪を持つて帰つたので二人で炊き
ました
握り飯にして塩をつけ夫を患者にやり
ましたが　患者の中には二日間も食べず
に居た者もあり　握り飯一つを　非常に
喜んで食べてくれました
大行李は夜中の二時頃着きました　徵
發に行つたりなどして　翌日の朝食からは
給養が出來ました

一杯の水

第四野病　衛生軍曹　岩下國康

既に南京城の一角は占領されたとはいへ
城内から射出す敵の銃砲彈はひつきりなし
です
此処安德門に到着した我々先發隊は　病
院に當られた家に行つてみました　すると
患者は我々より先に來て病院の到着を待つ
てゐる狀態です　早速病室を作る者　衛生
材料を運搬して治療の準備をする者　病床
日誌を作製する者等に手分をしました
何時の間にか辺りは真暗になつてゐます

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

砲弾を射ち込まれるため屋外には絶対に燈火を洩らすことが出来ません

時々小銃弾がトタン屋根をパン〳〵と叩き　時には砲弾が近くに飛んで来ます

患者は次から次と送られて来る「此處が我等の第一線」と皆行軍の疲れも忘れて治療看護に努めました　患者の中には手術を要する者も居ますが何しろ應急衛生材料ばかりです　手術の材料が無いその上衛生部員も一部の人員だけで手不足です　なんといふ情ないことでせう

其時一人の重傷兵が運搬されて来ました十二時頃でした　早速軍医殿が手を握られ"カンフル"を續けざまに七、八筒注射されましたが　効果がない　患者は苦しまぎれに

「軍医殿　水を飲まして下さい　軍医殿水を……」

と叫ぶ　残念乍ら腹部を負傷してゐるので水をやることは出来ません

其時軍医部長閣下が来られ　患者に向って

「水がほしいか　一杯飲ませてやるぞ」

と溜息の中から言はれました　患者は嬉しさうにして待って居ます

コップ一杯の水が渡されました　患者は如何にも嬉しさうに　キューッと飲乾しました　閣下が

「君達の働きに依って南京は陥落したぞ　君達も元気を出して早く達者になってくれ」

と呼びかけられた時　その患者は不意に苦しい息の下から

「天皇陛下萬歳」

と叫び立派な最期を遂げました

死に臨むまで氣丈であったこの患者に勵斗致れ　徹夜して患者の治療、看護に萬全を期しました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

「閣下お顔を見せて下さい」

第三野病　衛生軍曹　宮原岩雄

南京城外南方約四粁楠家村に病院開設中のことでありました

激戦に次ぐ激戦に、負傷者は續々と收容されました。この負傷者の中に腹部と眼部貫通銃創を受けた歩兵十三聯隊の某兵がありました

收容當時は意識も明瞭で應答も確實でした　両創からは出血多量で戎衣は各所に血痕生々しく　彼の勇戦奮斗の様を物語っておりました

どうしても重症でありましたが　治療終了後も一番の苦痛者間も口渇をも訴へず　追々と病状悪化し昏睡状態に陥りました

明くれば十二月十二日午前十時　谷師団長閣下が患者慰問のため來院され　一室一室を親しく慰問して廻られました

愈々彼の病室にも來られました　御厚情溢るゝ閣下の慰問の御言葉が　昏睡状態の彼の脳裏にも響いたものか　突然

「師団長閣下　お顔を見せて下さいし」

と叫びました

閣下は早速彼の枕頭に寄られましたが悲しい哉彼は両眼共に傷つき　繃帯に覆はれ残念にも閣下のお顔は見えないのであります　眼をやられてゐることに気付かれた閣下は黙ったまゝ右手をサッと差出され　もゞむかれたまゝ其手をぎっと握りしめられました　彼の手は感激と喜悦にワナ〳〵と打震へて見えました

同室の患者達は　感激の余り目視するに耐えず　いつしか隨所に嗚咽の声さへ起るのでした　私達も感胸に迫り感涙に咽ぶばかりでありました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

午後二時頃から彼の病状は漸次悪化し
再び昏睡状態に陥り　愈々生命も数分の後
に切迫したやうに見えました　彼も自分の
最期を豫知したものか　突然苦しい声をふ
りしぼり
「天皇陛下萬歳
天皇陛下萬歳」
と奉唱しながら死んでゆきました　南京
陥落の月の歓びも知らずに

百名の患者を
擁して敵襲を受く

衛生隊　歩兵中尉　呼野八熙

南京陥落の翌朝の事でした
私達は百名に余る患者を擁してゐました
が　私達第二小隊は僅かに二十搭乗しか持
つてゐなかつたのであります
それでも警戒兵を出して　萬一に備へて
ゐました
稍々左前方に友軍の騎兵の警戒兵が見え
てゐました
すると突然
「敵襲ッ」
と声がしました
さあ患者の処置に困りました　立りとて
喧嘩の間に名案も浮びません　仕方なく薬
などを全患者の上に被せ　一寸見では判ら
ぬやうに隠しました
そして百名の患者の護衛に僅か二名を残
し　他は全員配備につき應戦しましたが
（いよ〳〵最後だ）と覚悟しました
所が意外にも敵は退つてしまひました
多数の兵力と錯誤したのでせう（あの敵が
ひた押しにやつて来たら）と全く冷汗三斗
の思ひがしました

0675

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

重傷の患者は何んと幼友達

第四野病
衛生上等兵　吉永　左門

昭和十二年十二月十五日首都陥落して三日目、城内はまだ黒煙蒙々として大厦高楼が炎上しております

此処は中華門を一粁余離れた女子師範學校であります　辺りはまだ新戰場の血腥さい空気と共に　騒々しい空気が漲っております

勿論支那人など影も見せず凡て逃げ去った後でした

我が病院は　この師範學校に病院開設を命ぜられ　十四日衛生隊の後を引継ぎ患者収容に努めました

此処に着くまでの五六日間といふものは不眠不休で患者収容に當って来たのでしたが　ここに来てからも尚一層緊張して勤めなければなりませんでした

南京攻略の犠牲となった勇士達は　次から次へとどん〳〵収容されました

忘れもしない十五日　南京城も夕闇に包まれる頃　○○病院から又もや百餘名の戰傷患者が後送されて来ました

部室を作ったり　擔架で運ばれて来た患者を寝かせたり　収容に轉手奮闘してゐる時　後送患者の一人が

「吉永君　吉永君」

と呼んだやうでした　ハッと気付いて其の方を見ましたが　部室の中は暗いし忙しさは目が廻ふばかりで　誰が声をかけたものかさっぱり分りません

又も患者の中から頻りに

「吉永君　佐藤だ　義信だ」

その声を聞いた時

「あッ　佐藤君」

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

思はず駆寄りました

「吉永君、残念だ　やられた」

と呻吟く様にして言をくびしばるのでした

自分は何と言つていい慰める言葉も出ませんでした

よく働いてくれた佐藤君　思へば小学校から青年学校と共に学び共に遊んだ親友の問柄　それが支那事変と共に一緒に征途に上り　北支・中支と戦ふ度に幾分こともあらうと思つてゐたのに　今日までその機会を得ず　今日過然にも自分の居る病院に入院して来るとは　何んといふ運命か　思ひ掛けなさに声も直ぐには出ませんでした

彼も親友の自分が居るのを見て　どんなに力強く思つたことでせう

今は血の気の無い青ざめた顔や　意志さうにがつと固くかみしめた　唇には鐵鋼を背せて　苦痛を堪え忍ぶ友を眼前に見乍らどうすることも出来ませんでした

突然

「痛い〈　吉永君繃帯をゆるめてくれ　頼む」

と訴え出しました

自分は思はず足の繃帯に手をやりました

両脚は一面に繃帯されてゐます　血に染つた繃帯を解きながらも（命に別状はないか）と気掛りでなりませんでした　段々解くにつれて（生命は大丈夫）と思ひましたが砲弾の為に蜂の巣の様にやられた片足は（とても駄目だ）と直感しました（あい友は不具者となつたか）　思はず瞼の熱くなるのを覚えました

「佐藤君　よく働いてくれたね　有難う」

「何？に　まだこれからだ　一日も早くよくなつてきつと仇は討つよ」

翌十六日早朝から繃帯交換が始まりました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

気掛りでなりません 軍医殿に訊けば
「矢張り切断せねば駄目だらう」
と言はれます 自分の事のやうに思はれ
悲憤の涙が溢れるのをどうにも出来ません
でした
佐藤君の傍に行く度に 彼は言つてゐま
した 何にも知らないから
「一日もしたら全快するだらう 傷が癒つ
たら一日も早く今一度戦線に立ち 仇は
必ず討つし
と 最期に付つて
「君の足はどうしても駄目だ」
とどうして言へませう
慥か三日にして十八日には病院異動の為
に 全員解散することになりました
戦線で初めて逢つた幼友達が 重傷を負
ふてゐるのに眼の前で 看護もろくにしてやれ
ずに 後送せねばならぬのが 吳々も残念で
なりません でした

車輌の上に乗せられ 愈々別れになりま
した
「吉永君 御世話になりました 一ヶ月もし
たら又戦線で逢はう お元気で」
自分は返す言葉もありません
「大事にしたまへ」
それだけがやつとのことでした
城内の臨時病院へと車輌に揺られて行く
後姿を見送つてゐた自分は たゞもう胸が
一杯になるのでした

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp